

その他

京都薬科大学における 2021 年度授業に向けた FD 活動の展開

近藤利彦^{1*}, 森 洋介¹, 柴田敏之^{2,3}

¹ 京都薬科大学 教務課

² 京都薬科大学 教務部長

³ 京都薬科大学 薬物動態学分野

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を社会全体で受けた年となった。それは本学においても例外ではなく、2020 年 4 月以降の講義は主にオンデマンド配信にするなどの対応を迫られることとなった。緊急事態宣言解除後は、できるだけ対面講義を実施してきたが、学修到達度、学修習慣の定着、コミュニケーションの問題が指摘されてきた。

そこで 2020 年度に実施した講義で明らかになった問題点を解決するとともに、次年度以降の新しい授業形態を模索するための FD 活動を展開したので、その内容について報告する。

キーワード：授業, FD, オンデマンド配信型授業, 同時配信型授業 (オンライン型授業)

受付日：2021 年 4 月 7 日, 受理日：2021 年 5 月 11 日

【はじめに】

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を社会全体で受けることになった。本学においては、文部科学省通知や京都府からの要請に従い学修機会の確保と学生をはじめとする大学構成員の安全を念頭に対応してきた。

具体的には、2020 年度前期講義についてはすべてオンデマンド配信とした。後期は 1・2 年次生を中心に対面講義を実施した。学修到達度を測るための定期試験については、前期はラーニング・マネジメント・システムである

manaba を利用してオンライン試験を、後期は対面で実施した。

以上のように授業を展開するなかで、学修効果の定着が問題となった。また次年度に向けて、2020 年度の経験を踏まえて ICT を活用した新しい授業のあり方が求められることとなった。これらの課題・問題にこたえるため、2020 年度の FD 活動を企画・実施した。

【2020 年度の FD 活動について】

2020 年度 FD 活動は表 1 のとおり実施した。

第 1 回 FD 活動に先立ち前日の 12 月 15 日 (火) に全職員向けに 2021 年度の教学方針に関する

* 連絡先：

〒 607-8414 京都市山科区御陵中内町 5
京都薬科大学 教務課

表1 2020年度FD活動の概要

| | 日時 | 講師 | 演題 | 実施方法 |
|-----|------------------------------|---------------------------|--|--------------------------------------|
| 第1回 | 2020年12月16日(水) 17:00～ | 株式会社内田洋行 担当者 | | 対面+オンデマンド配信 |
| 第2回 | 2020年12月23日(水) 10:00～ | 株式会社内田洋行 担当者 | | 対面 |
| 第3回 | 2021年1月13日(水) 13:00～14:30 | 公立ほこだて未来大学 富永敦子 教授 | 教育効果を高めるための オンライン授業のデザ イン | オンライン配信 +オンデマンド配信 |
| 第4回 | 2021年1月26日(火) 16:00～17:00 | 大阪工業大学 井上 明 教授 | Teamsを活用した授業実 践の紹介 ～大阪工業大学でのオン ライン授業実施事例～ | オンライン配信 +オンデマンド配信 |
| 第5回 | 2021年2月19日(金) 15:00～16:30 | 金沢工業大学虎ノ門大学院 川瀬 真 客員教授 | 遠隔授業における著作 権の取扱いについて | 対面-オンライン配信の ハイフレックス型 +オンデマンド配信 |

説明会が開かれた。このなかで、知識偏重の授業から「学生主体の教育」への転換が求められた。学生自身が能動的に学ぶように支援することで高い学修効果を目指すことが謳われた。2020年度の後期では1, 2年次生を中心に対面講義を実施したが、出席率が低く、オンデマンド配信されている講義の視聴率も低いことが喫緊の問題として挙げられた。そこで2021度については、科目の性格にあった授業形態をとり、対面講義が実施できない場合でもインタラクティブな講義を実施することが確認された。

これを受けて実施された16日のFD活動では、2021年度の授業の高度化のために改修した講義室の設備のデジタル化、Webによる講義システムとして用いることができるMicrosoft Teamsを使った双方向授業について、内田洋行の担当者から説明していただいた。

第2回は、12月16日のFD活動をうけて、実際にTeamsを操作して体験することで、同時双方向授業のための習熟を図った。ただし、実技を伴う研修の内容上、人数を限定しての開催となった。

第3回では、教育工学を専門にされている講師の富永教授から、専門的見地から多くの示唆

をいただいた。講師が所属する公立ほこだて未来大学は、2000年の開学以来PCを必携化されており、対面講義とオンデマンドまたはオンライン配信を組み合わせたハイフレックス型講義のノウハウも豊富である。それぞれの授業の目的、内容に合った授業デザインをするということが基本であるとの話があった。そのうえで、オンラインを利用した様々な授業デザインが紹介された。2021年度の授業構築に役立つ内容であった。

対面授業とオンデマンド配信などの遠隔授業の効果を比較したデータも示された。授業形態の違いによる教育効果の違いについては、教員の関心も高く有意義なデータを提供していただいたと思う。また、課題や小テストを実施し学生の授業への参加度を高めることで、学生の変化を発見することにもつながるという示唆もあった。

第4回の井上講師からは新型コロナウイルス感染拡大に伴う講義の変化やTeamsを利用した授業実践について、講演いただいた。勤務されている大阪工業大学は2018年から全学でBYOD (Bring Your Own Device) を実践しており、井上講師は新型コロナウイルス感染拡大以前か

ら Teams を取り入れた授業を行ってきたとのことである。この講演では具体的な授業実践が例示され、また Teams の拡張機能なども紹介していただいたことで、2021 年度の授業に関して具体的なイメージを持つことができた教員も多かったようである。

第 5 回講師の川瀬氏は、著作権管理団体の理事もされており、専門家の立場から著作権法、特に教育に関わりの深い同法第 35 条に関して解説していただいた。著作権法は、著作権者の権利を守る法律のため、利用する側としてはわかりにくい面もある。著作権の制限については、対面講義と遠隔講義では注意すべき点が異なる場合もある。2020 年度と 2021 年度においては、特例措置により著作権の制限も大幅に拡大されたが、オンデマンド配信を開始した当初には相当な注意が必要であった。川瀬氏には授業で著作物を利用する際の注意点について、わかりやすく説明いただいた。

なお、2021 年度からは授業目的公衆送信補償金等管理協会（Society for the Administration of Remuneration for Public Transmission for School Lessons：SARTRAS）が本格的に活動を開始し、本学においても参加することが確認された。

つぎに FD 活動への出席状況を紹介する。

2021 年 3 月現在の特命教員を除いた教育職員の在籍者数は表 2 のとおりである。全体では 102 名が在職している。なお、第 2 回までが実施された 2020 年 12 月は助教 32 名、全体で 103 名が在籍していた。

2021 年度の教学方針に関する説明会から第 5 回 FD 講演会までの出席者数、出席率はそれぞれ図 1、図 2 のとおりである。

授業や実務実習の訪問指導等の業務がある中で、毎回 5 割以上の教員が出席していた。第 2 回については、出席者数に限りがあったためグラフからは除いている。第 2 回では 40 名の枠に対して 10 名の出席があった。

なお、出席について、ライブ配信の場合は Teams 上で出欠を確認し集計している。オンデマンド配信もしているため、Teams で出席が確認できなかった場合でも、FD 活動後に実施したアンケートに回答があった場合は、出席者としてカウントしている。

また、FD 活動のため参加対象を教育職員としているが、毎回事務職員の出席が一定数あ

表 2 教育職員在籍者数（2021 年 3 月）

| 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 |
|----|-----|----|----|----|
| 34 | 21 | 12 | 31 | 4 |

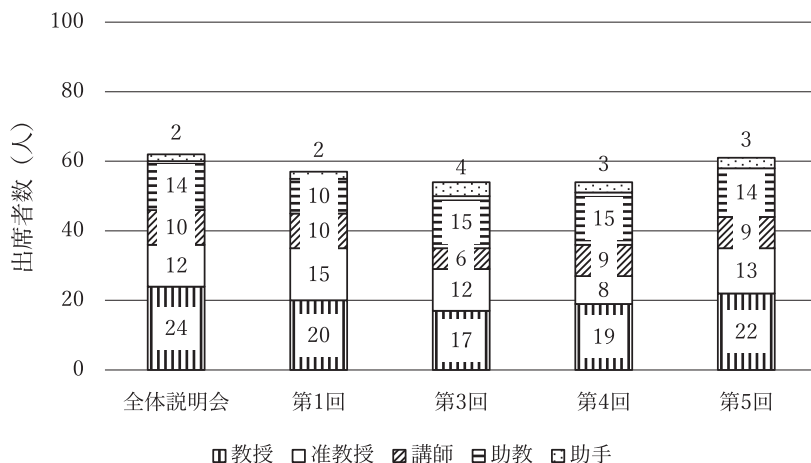


図 1 FD 活動出席者数

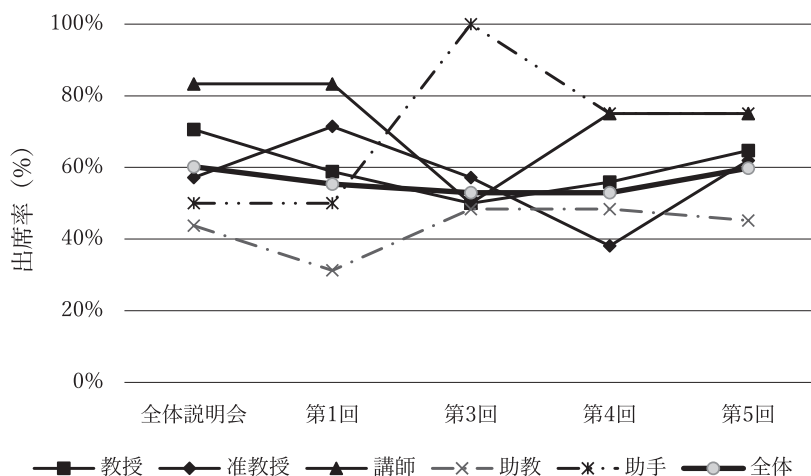


図2 2020年度FD活動出席率

たことを申し添えておく。

前述のとおり、FD活動後にアンケートを実施した。そのアンケート結果から、感じられたことを以下に紹介する。

第1回においては Teams の機能紹介が中心であり、新たな発見があった教員からは次年度に向けて自らの担当科目における改善の意志が多くの回答で見られた。2020年度は、対面講義を除いてすべてオンデマンド講義であったが、2021年度はインタラクティブな授業が志向されているため、Teams の「White Board」や「Breakout room」といった機能について強い関心が寄せられた。

第3回においては、学生に対するフィードバックの方法に多くの関心が寄せられていた。また、具体的な授業デザインにも触れられており、反復かつ持続的な授業運営を考えている様子がうかがえた。授業デザインを工夫することで、学生の理解度やモチベーションを上げようとする意図が感じられた。

第4回の講演会はより実践的な内容であったため、アンケートのコメントもより具体的な内容であったと思う。学生の集中力を維持する方法や、講義における双方向のコミュニケーション

を図っていきたいとの意見があった。また演者から、知識を伝達するだけの授業つまり学生にとって聞くだけの授業をそのままオンライン化しても学生のモチベーションは下がるだけであると話があり、学生の参加度をあげたいとの回答もあった。対面講義とオンライン講義は対立概念ではなく、長所を組み合わせる必要性も感じているようであった。

第5回はテクニカルな話が多く、一部から著作権を十分理解することは難しいとの意見があった一方、引用や資料のアップロードなどにおいて適切な運用を心がけたいという意見があった。また、学生にも著作権保護について、講演を生かして伝えたいという回答もあった。

【2020年度の活動を振り返って】

2020年度の授業に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響による緊急事態対応であった。課題が持ち上がるたびに解決策を考える状態だったと言える。そのような状況で、学生、また教育職員には大変な負担を強いてきたと感じている。

2021 年度については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大はすぐには収束しないであろうが、「慣れ」から大学を含め社会は幾分かの落ち着きを取り戻し、活動量は増加することが予想される。本学においては、2020 年度に導入したオンライン授業の長所を生かした新しい授業のあり方を模索する年になっていくはずである。第 3 回・4 回の講演会を通じて、演者は、その授業に目的・内容・人数等に合わせた授業デザインが必要であると訴えていたように思う。言い方を変えれば、学習者本位の授業を構築する必要があるといえる。

また、第 4 回で井上講師から Teams 上に設けた FAQ コーナーに関する事例紹介があった。学生からの質問に教員が答えることを想定して設けたものであったが、学生同士が教え合う場面があったとのことである。これは、対面講義で実施していれば、教員とそれぞれの学生と 1 対 1 の関係であったものが、インターネットを介してまさにネット状の関係が構築されたといえるのではないだろうか。単純に知識を伝えるだけの対面授業では生まれにくいグループ・ダイナミクスが、インターネットを介して生まれたとみることができ、ICT を活用するひとつの長所であるといえると考えられる。加えて、学

生相互の関係が生まれることにより、学びに対する駆動力が増すことが考えられる。他者の存在が学びへの駆動力を上げ学生を主体的な学習者へと導くことは、富永講師が示した事例でも見られたことである。

今回、講演いただいた内容を一度にすべて実践することは困難なことだと思うが、アンケート結果を読む限り、在学生のために考え行動しようとする教育職員は多い。

2021 年度も対面授業の全面的な再開は望めないかもしれない。一部の学生にはオンライン配信の講義を受講してもらい、いわゆるハイフレックス型授業を実施することになる。授業の構築は 2020 年度よりさらに困難なものになると思われるが、教員だけの努力で解決できるものではない。アンケートを通して気づかされたことであるが、今後も事務局のサポートをさらに充実させる必要がある。2021 年度は教育職員と事務職員がさらに協力し、よりよい学修環境を提供すべく、教務課としても取り組んでいきたい。

【引用文献】

公立はこだて未来大学 HP : <https://www.fun.ac.jp/>
大阪電気通信大学 HP : <https://www.osakac.ac.jp/>